

SERIES

明日のスポーツをめざして 1

岩手県ウエイトリフティング協会 強化委員長 県立水沢高校教諭 吉田 新一

「新入部員何人?」「うちは〇人しか…」毎年、新年度がスタートした4月中旬になると、ウエイトリフティング部の顧問間でこんな会話やメールのやりとりがある。

競技者確保というマイナー競技の共通課題。次期岩手国体を7年後に控えた現時点でも根本的に解消されないままだ。本当に頭が痛い。

しかし、競技成績は立派だ。国体の天皇杯競技得点は平成9年から14年連続で2桁得点で推移している。合計100点を突破した「盛田3兄弟」をはじめ、多くの選手の活躍が生んだ数字である。

今年の新潟国体も素晴らしかった。特に盛岡工勢の活躍は特筆に値する。今夏インターハイを制した56kg級内村湧嬉が、ジャークとトータルで優勝して全国2冠を達成。105kg超級吉田大地もトータル2位、ジャークでは岩手の少年勢過去最高の155kgを挙げて日本一に輝いた。最終試技でインターハイ覇者に逆転したシーンは圧巻であった。

こうした実績と活躍だけを見ると、地元国体に向け「視界良好」と言いたいのが、冒頭のとおり、競

技者確保に東奔西走しつつ強化に努めているのが実情だ。

この実情に鑑み、本協会が競技者確保に向けて努めるのは当然だが、その先に、競技が正しく理解されていないという問題がある。「力持ち」「体が大きい」人の競技、「ケガをしやすい」など、イメージで競技が捉えられている面がある。「力」はトレーニングの成果、階級制、ケガは正しいフォームで防止可能である。大局的に見て、多くのスポーツに筋トレが導入されている中、その基本を学べるこの競技に関心が希薄であることが残念ではない。この拙稿を読まれるスポーツ関係の(特に中学生を指導される)方々、本競技への正しい理解と積極的導入は決してマイナスにはならないと考える。ひいては、競技の普及にもつながり、本競技にとっても、他のスポーツの競技力向上にとっても十分役割を果たすものと確信するところである。

7年後に控えた地元国体。本協会としては競技者確保に優先的に取り組むが、他競技との連携が波及効果を生むような気がして止まない。

